

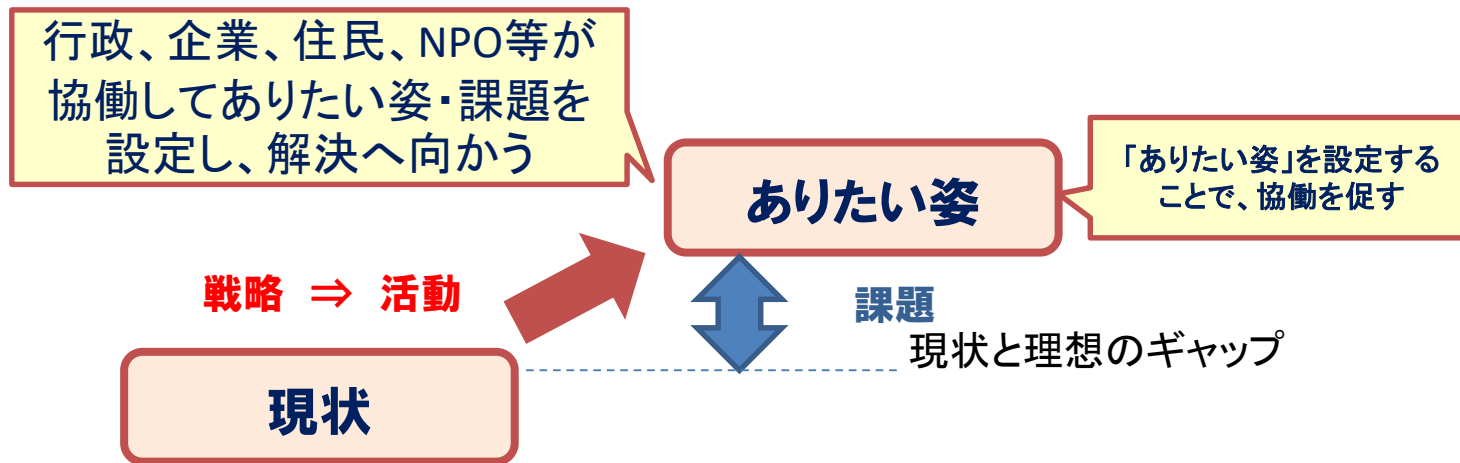
## ■目的

- (1) 各政策分野（10程度）における**ありたい姿の具体化・共有**
- (2) 各政策分野における**現状とのギャップの確認、課題の抽出**

## ■個別分野ワークショップ実施の狙い ※第六次総合計画の策定方針から

狙い：政策検討への市民の参画（＝行政の限界を超えるため）

- (1) 住民・事業者等の視点や知識を生かした分野別のゴール・戦略の設定
- (2) 策定後にも、行政単独ではなく、協働で政策を推進するための関係構築、機運醸成



## ■日程・場所

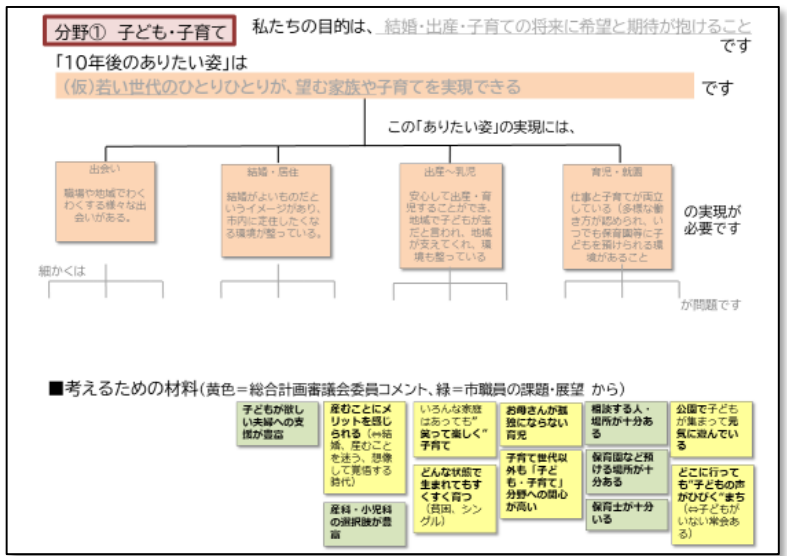
令和4年10月21日、11月24日、28日、29日  
 (2.5時間×10グループ)  
 塩尻市役所本庁舎5階 大会議室

## ■参加者

関係団体、分野有識者、審議会委員等 延べ28名  
 市役所職員（庁内策定チーム員等） 延べ46名

# ワークショップ 準備～実施～まとめの流れ

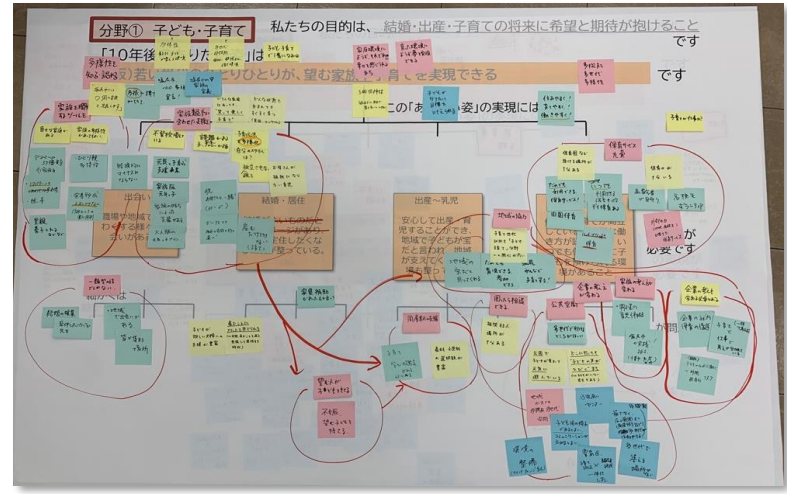
## 1 市民アンケート・市職員意見や第2回審議会委員意見をもとに、作業シートを作成(準備)



## 2 関係団体、分野有識者、審議会委員と市役所職員で意見を出し合う(当日)



## 3 出し合った意見を確認・整理(当日)



## 4 検討結果をまとめ(後日)

分野①パートナーシップ・子育て 私たちの目的は、子どもたちがいる暮らしや子どもの将来に希望が持てること、だから「10年後のありたい姿」は

家族の多様性やそれぞれの幸せについての理解のもと、家庭環境によらず子どもと家族が応援され、安心して支援やサービスが得られること

この「ありたい姿」の実現には、

多様性を知ること	多様性を理解すること	多様性を踏まえた支援が展開されること
<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な家族が体系的に整理されている</li> <li>「多様性」という言葉でぼやかしてしまふ施策ターゲットを具体的に説明できるようにしている</li> <li>※アンケートには37種類の家族があるとされている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家族類型に合わせて、支援が充実していく</li> <li>元気づけ子育て支援のデータベースが、家族類型ごとの集約的に活用されている</li> <li>※家族類型について情報がまとまっている(子育て体験講座、学校・生涯学習との連携)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>望む人が、子どもを持ち、子育てしたることができるようにする</li> <li>抱いたら抱えられる体制が充実している</li> <li>不妊治療、養子縁組、結婚、再婚等の支援がバランスよく実施されている</li> <li>ニーズに合うサービスの再編成と多機能化</li> <li>家族類型ごとの幸せについて情報発信・支援が行われている(再産前産後・健康等)でも、いつでも利用できる子どもへの悩みや多世代交流の場が充実している</li> <li>地域による子育てへの協力が広がる</li> <li>家族類型ごとの困りごとや地域・企業とのサポートが共有されている</li> </ul>

の実現が必要です

【ワークショップの概要】

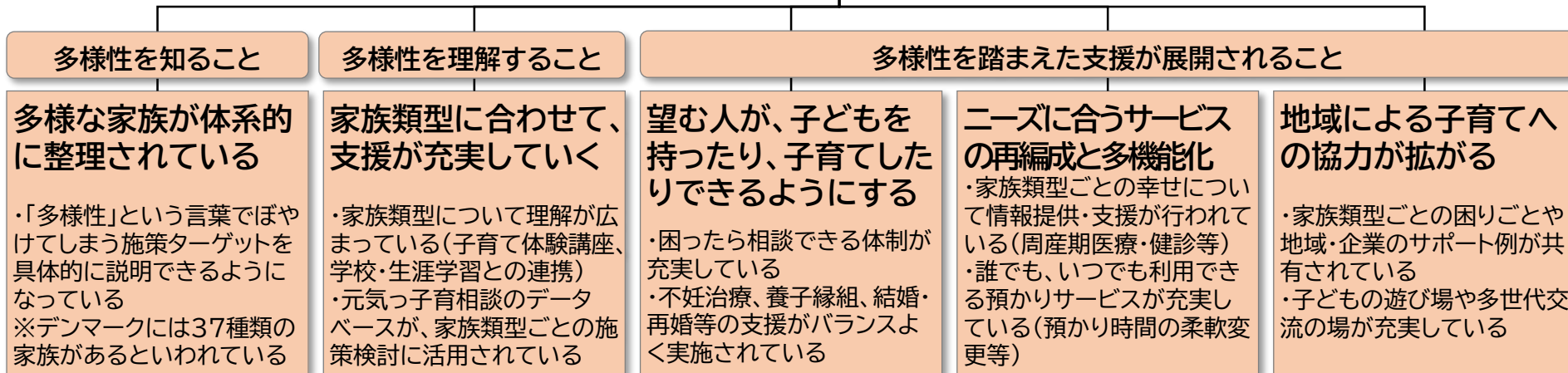
- ・少子化、親の孤立化等の課題が叫ばれて久しい。若い世代は子どもを持つことを、意識して「選択する」という状況におかれている。
- ・近年、共働き家族が増加し、「父親が働いて、母親が家において、子どもがいる」という従来の「一般的な家族」の割合は減少している(「13歳児神話」は既に過去のものとなっている)。少子化がますます深刻化する背景には、「一般的な家族」像に押し込まれた、または、外れてしまったことによる、生きづらさ・暗転模索感が影響しているのではないかと。
- ・家族が変化すれば、支援のあり方も変化はするはずである。しかし、家族の変化の実態は、十分に把握されていないのが実情である。そのため、塩尻市の子育て家族の実態を把握し、それを元に支援を再編成していくことが必要なのではないかと。
- ・また、地域や企業等も子育て家族の実態を把握し、地域全体として子育てに協力していくことで、真に「住みやすく、育てやすく、働きやすい」まちが創られるのではないかと。

「10年後のありたい姿」は

家族の多様性やそれぞれの幸せについての理解のもと、**家庭環境によらず子どもと家族が応援され、安心して支援やサービスが得られること**

です

この「ありたい姿」の実現には、



の実現が必要

【ワークショップの概要】

・少子化、親の孤立化等の課題が叫ばれて久しい。**若い世代は子どもを持つことを、意識して“選択する”という状況**におかれている。

・近年、共働き家族が急増し、「父親が働いて、母親が家にいて、子どもがいる」という従来の“一般的な家族”の割合は減少している(「3歳児神話」は既に過去のものとなっている)。少子化がますます深刻化する背景には、**“一般的な家族”像に押し込められた、または、外れてしまったことによる、生きづらさ・暗中模索感**が影響しているのではないかと。

・家族が変化すれば、支援のあり方も変化するはずである。しかし、家族の変化の実態は、十分に把握されていないのが実情である。そのため、塩尻市の子育て家族の実態を把握し、それを元に支援を再編成していくことが必要なのではないかと。

・また、**地域や企業等も子育て家族の実態を把握し、地域全体として子育てに協力していくことで、真に「住みやすく、育てやすく、働きやすい」まちが創られるのではないかと。**

「10年後のありたい姿」は

すべての子どもたちがワクワクする学びを自ら発見できるとともに、周りにも共感でき、「塩尻で育ってよかった」と思う体験ができること

です

この「ありたい姿」の実現には、

ワクワクする学びの場や機会・時間をみんなで作る

多様性を包み込む環境をつくる

ワクワク(主体性)と協働で(深く)学ぶ

- ・基礎学力が育まれている
- ・自ら考える力、対話力等「ワクワク」の土台が強化
- ・デジタルが活用されている
- ・友達・親子で学び合う
- ・地域や企業との連携、学ぶと働くの境目がない生き方(キャリア)教育

学校を取り巻く資源を再整理・活用する

- ・学校・地域の教育資源(ヒト・モノ・コト)を効果的に活用する実践が進んでいる
- ・本気の大人から学ぶ機会が増えている(各種行事)
- ・特性に応じた個別最適な環境がある

児童・生徒に向き合う場・時間が増える

- ・保護者が自身の子育て・教育を考える場がある
- ・学校の働き方改革、ライフワークバランスが進んでいる

学びの場・居場所が充実している

- ・好きを伸ばす・多様な学びの場・居場所がある(児童クラブ・放課後キッズクラブ、部活、習い事、遊び場、図書館等)

困難や悩みを支える環境がある

- ・様々な個性や家庭環境に関する理解が広がっている
- ・フォーマル・インフォーマルな支援が充実している
- ・困難を抱えていても、自己肯定感の高い児童・生徒が増えている

の実現が必要です

【ワークショップの概要】

・近年、「チャレンジしやすいまち」として塩尻を評価する大人が増えている。大人が感じている塩尻の魅力を児童・生徒にも体感してもらいながら(塩尻の強みを活かしながら)、ワクワクしながら学べる環境を充実していくことが、重要なのではないか。また、深い学びの体験を重ねることで、愛郷心が育くまれることも期待できる。

・学校には、地域の教育資源を活用しながら、塩尻版の主体的かつ対話的な深い学びを開発して行ってほしい。その際、学校はもっと地域や企業と連携してもよいと感じる。また、学校の外の学びの場や居場所も重要である。

・大人が児童・生徒に本気で向き合うことで、良い教育効果が期待できる。児童・生徒に関わる場・時間のある地域社会をみんなで作っていく必要がある。

・様々な事情を持つ家庭が増えている。それぞれの幸せの形を理解し、支えることで、困難があっても、ワクワクする未来を発見し、学んでいけるまちの実現に挑戦していくことが求められる。

「10年後のありたい姿」は

一人ひとりが“特別好きな＝推し”余暇活動で自身と次世代の笑顔溢れる豊かな生活をつくり、このことが誇りや愛着、新たなつながりを生んでいること

です

この「ありたい姿」の実現には、

運動する機会・場が豊富にあり、スポーツ人口が増えている

- 気軽にスポーツに参加できる機会や場がある
- 幅広い部活動の指導が地域に育っている
- 子どもも大人も運動の機会が増え、体力が向上している
- スポーツをとして一人では得られない充実感を得ている

主体的な学びができる場やツールが充実している

- 多分野の市民サークルが活動し、学んだ内容が発信・共有されている
- 文化芸術の鑑賞にデジタル技術が活かされている
- 学びの成果が個人の生活の豊かさだけでなく地域にも還元されている
- この地域で学んだことが幸せの原体験となっている

文化を守ることが地域づくりや次世代育成につながっている

- 文化財についての知識を得られる機会や知りたいことに答えられるしくみがある
- 市民が誇りをもって地域の歴史・文化の価値を発信している
- 文化財が市民共通の財産として次世代に継承されている

活動を通じて、新しいつながりが生まれる

- 活動や学びを通して、人とのつながりが広がっていく
- 祭りなどの地域活動で子どもと大人がつながっている
- 一緒に活動する仲間ができています
- 異なる分野の活動を知り、新しいことを始めるキッカケになる

の実現が必要です

【ワークショップの概要】

- えんぱーくやユメックスアリーナなど、学びやスポーツの場は整備されており、活動人口は増えつつある(ユメックスができたことでスポーツ人口が延べ7万人増)。
- 部活動の地域移行が議論されているように、地域の文化・スポーツ分野で活躍できる人材が求められている。
- 地域固有の伝統文化やスポーツ体験が地域に対する原体験やウェルビーイングの形成に深く関わっている。
- 一人ひとりが好きなことを持ち、余暇活動を充実させることは日々のルーティンの活力にもつながる。
- 学びや文化・スポーツ活動を通じて、心身の健康だけでなく、地域づくり・次世代の人づくりにつながる。
- 活動することで人與人、異分野や異世代がつながり、新しい文化が生み出されていく。

塩尻に魅力と価値を見出す人たちがつながり、喜びと誇りを持ちながら働き、多様で付加価値の高い事業・商品・サービスを支えている

です

この「ありたい姿」の実現には、

生活し、働き、挑戦したい意味(働く人視点)

働く人や企業が塩尻を選んでいる

- 住みたい/働きたい地域として、塩尻が選ばれている
- 若者が夢を持てる魅力ある仕事があり、生活できる収入がある
- 移住・定住した人がここを選んだ理由を語れる
- 新規就農者や体験者の住まいの確保の仕組みがある

“はたらく”を通じた自己実現ができる

- 働き方、仕事、キャリアを自分でデザインし、決めている
- 世代・文化のギャップを認め、理解しあう土壌がある
- 幸せや実現したいことに対して向き合い、挑戦することができる環境、人のつながりがある
- ベテランのノウハウを受け継ぐ仕組みがある
- 仕事と余暇と趣味とが融合している

多様で付加価値の高い事業が形成され、集積(事業者視点)

業種・規模・職種の多様性が選択肢とリスク分散を実現

- 1・2・3次産業が市内で発展。付加価値の高い製品やサービスを提供する企業・人が集積している。
- 稼ぐ農業を目指した農業法人と里山を残しながら小規模な農業を営む兼業農家の両方がある
- 働く選択肢が豊富で、世代交代、事業継承、新たなビジネス手法、未来への投資(学び・設備投資等)も行われている
- 地場産業、商店街、伝統産業等を多くの人が関わっている(副業・外部協力者・企業連携等)。ソーシャルビジネスも集積。
- バランスのとれた土地利用により工業・商業・農業・住環境が良い形で立地し、土地が有効に活用されている

物語がある(消費者視点)

消費者に塩尻の物語が伝わる

- ものづくりの背景、ストーリーを消費者が理解したうえで、積極的に選択している
- 農業者と消費者の交流が活発に行われている
- ワインやぶどうなど産品が堪能できる拠点がある

の実現が必要です

【ワークショップの概要】

- 塩尻には、自然が豊富で暮らしやすい環境があり、様々な外部の人や企業を受け入れる土壌がある。この地で生活し、働き、挑戦し、自分らしい人生を送る人が増えていく状況の実現を目指したい。
- 安定して稼ぐことができることが、働く人にも企業にもまず第一に重要。このためには、価値を生み出すことに挑戦する人や企業が集まりつながり、学びなおし、仕事を新陳代謝させ続けていくことが不可欠である。地域にある産業が産業間の垣根や地域・年齢の垣根を超えて連携し、新しい価値を生み出している状態を実現したい。
- 自然や農業といった良さを残し、自然と共存しながら、稼げる規模の大きな産業も育成していく必要がある。
- 産業の多様性があるからリスク分散ができ、他ではできない副業や分野を超えた事業展開が可能になることも、塩尻で働く魅力になっている。
- “塩尻産業の魅力”を伝えるための物語を意識した情報発信や消費者との体験交流・関係づくりも重要。

「10年後のありたい姿」は

生活や経済活動で、エネルギーをはじめ調達可能な**未利用資源が発見・活用されて、生活の充実や楽しみになり、都市の特徴と認識されていること**

です

この「ありたい姿」の実現には、

自給できるモデルが生まれ成長

生活に必要な資源をできるだけ自給している

- 地域に豊富にある、森林・水・農産物などを活用して、自足はできなくても、できるだけ自給することで、危機に強く、幸せを感じて暮らしている
- ハワードの田園都市構想の職住近接、市街地の周囲に農地、田園と都市の幸せな結婚を実践している
- できるものは市内調達し、できないものは近隣・松本平から調達

インパクトのあるモデル事業を展開

- 集落単位(農村や奈良井宿)でエネルギーを自給させ、自ら電気代を決定するような先駆的なモデルを実現している
- モデルが市内及び全国に展開し、先進地として認識されることで、環境面での都市競争力を得ている

無理しない環境配慮

カッコいい、楽しみながらできる脱炭素

- 我慢して環境配慮をするのではなく、夢があり、カッコよく、Z世代を引き付けるような脱炭素の取組みを展開している
- 環境負荷の可視化が進み、取組みに手ごたえがある
- 取組むとお得になる仕組みがある

実践活動が同時多発的に進み、弾みがついている

それぞれサーキュラーエコノミーを実装

- 実践が同時多発的に展開
- 野菜くず・廃棄野菜の活用法の開発
- 太陽光・小水力発電・バイオマス等の再生可能エネルギーが普及
- フードマイレージを減らす

事業活動が環境と共生

- インフラの統合により、移動やエネルギー消費を効率化
- 環境負荷が低い農業が実現
- 各種産業が環境に配慮し自然と共生しながら営まれている

の実現が必要です

【ワークショップの概要】

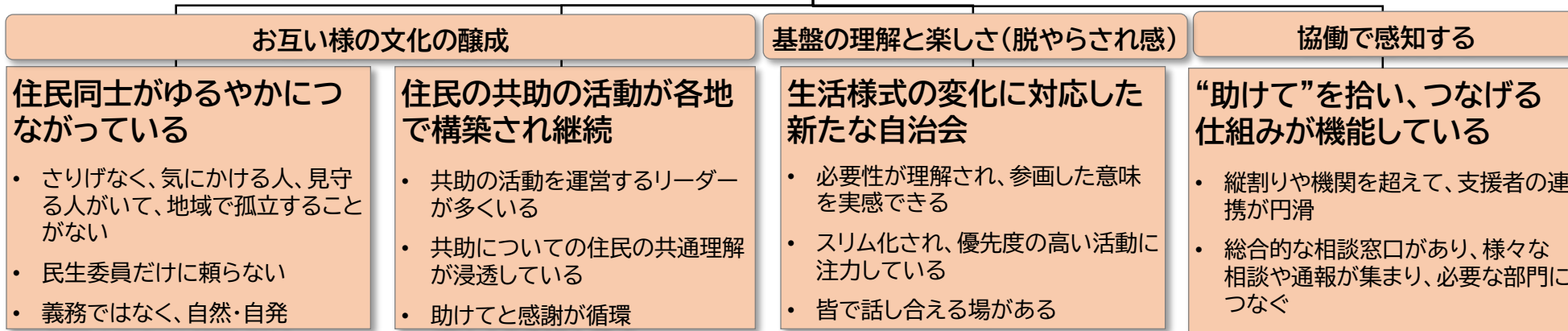
- 本市には、多様な自然資源(水、森林)や農業などの資源があるが、エネルギーとして活用しきれていなかったり、遠くから調達しているが、環境負荷を低減するには、未利用資源の活用や、できるだけ近場で調達することが必要である。この姿は、塩尻市が目指す田園都市のコンセプトとも合致する。
- ただし、あまり無理や我慢を重ねても活動が継続しないため、成果が目に見えるようにすることに加えて、取組むことが喜びになり、豊かさの実感につながるようなアプローチが必要。
- ゼロカーボンの取組みに弾みをつけるには、他の地域に先駆けて塩尻市らしい好事例をつくり、注目を集めたり、市内や他地域に展開させていくことができると良い。集落単位でのエネルギー自立、奈良井宿のゼロカーボン化などのアイデアがある。

「10年後のありたい姿」は

ゆるやかなつながりと、感謝が循環するお互い様文化で、**住民同士で日常生活の基盤**を作り、困りごとに動いていけること

です

この「ありたい姿」の実現には、



の実現が必要です

【ワークショップの概要】

- 高齢者が増加し、自立した生活に不安を抱える住民が増えるが、共助・互助の網を広げようと仕組み化することには限界がある。今一度、共助・互助の必要性を確認し、多くの住民がゆるやかに・さりげなく、他者を気にかける、見守るような雰囲気、地域づくりを進め、お互い様の文化を醸成していくことこそ、重要である。
- 住民主体の団体によるケアの活動などを活発化させるには、リーダーと担い手が必要であり、育成確保が必要であるが、活動を始める人や団体の足をひっぱる風潮もある。困った人が活動者・担い手に頼り、多くの人が感謝し支える循環をつくりたい。
- 現在の共助・互助には、自治会が多く動員されているが、すでに多くの仕事が集集中であり、役員の高齢化や、住民の多くも生活に追われ関与が減っている状況。このため「やらされ感」が募り、前向きに推進されない状況がある。今後、自治会を現在の生活様式にあわせて改革し、スリム化と優先課題に重点化していくことが必須。
- また、住民と行政、行政間、行政と関係機関において、困っている人や助けてを拾えるような相談窓口、通報・連絡先の共有などを強化・円滑化していくことで、暮らしの安心を実現していくことが必要である。



## ⑧医療・介護・保健・福祉(公助)

私たちの目的は、  
一人ひとりの心身そして社会的健康が守られること だから

「10年後のありたい姿」は

一人ひとりが老いや健康に向き合い、自らの心身の健康を守ることや周りに対して出来ることを考えて動き、**日常生活を自立して送ることが出来ること** です

この「ありたい姿」の実現には、

### 基盤の運用強化

必要な時に限りある医療や介護、福祉サービスが効果的に受けられる

- 松本医療圏での連携した医療体制で受診したいときに困らない医療が受けられる
- 介護・障害福祉サービスが必要な人に行き渡っている。
- 在宅でも医療・介護が安心して受けられ、自分らしい終末期の過ごし方を選べる体制がある
- 医療、介護、福祉に携わる人材が確保できている

制度や必要な知識を学ぶ場がある

- 老い、健康、障害について一人ひとりが知る機会が豊富にある
- 医療や介護保険の制度が広く理解されている
- 異世代間が触れ合える交流機会がある
- 子どもから高齢者まで健康づくりの重要性が認識されている

自分で守り(自助)、助け合える(互助)マインドが醸成

- まずは自身の健康や幸せに自覚的になり、一人ひとりができることをやる
- そのうえで困ったら助け合う、「助けて」ときちんと言える地域になっている
- 孤独・孤立した人が減っている
- 医療・介護が必要になっても一人で悩まないでいい、一人で頑張りすぎないでいいと思える

自助→互助→公助の好循環が生まれている

- 自立して生きられる人が増え、健康寿命が延び、高齢化が活力に繋がっている
- 介護される人が減り、その結果、社会保障費の伸びが抑えられている
- 介護に携わる人がやりがいを持って働いている

の実現が必要です

### 【ワークショップの概要】

- 幅広い分野にわたるが、共通するのは、まず必要な**制度やサービスの基盤**があり、そのうえでそれを市民が知って、正しく利用し、できること・できないことを理解し、「できることは自分で」、「できないことは助け合う」という自助・互助のマインドが醸成されること。それにより、「**自分**」→「**お互い**」→「**持続的に成り立つ福祉社会**」の**好循環**が生まれる。
- 基盤づくりばかりに目が行きがちだが、その循環をスムーズにしていく仕事**が公助と共助・互助の要**。好循環によって、高齢でも、障害があっても、誰もが活躍でき、生きるのがラクになる社会に近づけていく。
- 好循環のどこに課題や重点があるかは公的サービスの分野ごとに違う現実があるが、これまでの縦割りを打破することが求められている。

# 分野⑨ インフラ・防災・まちづくり

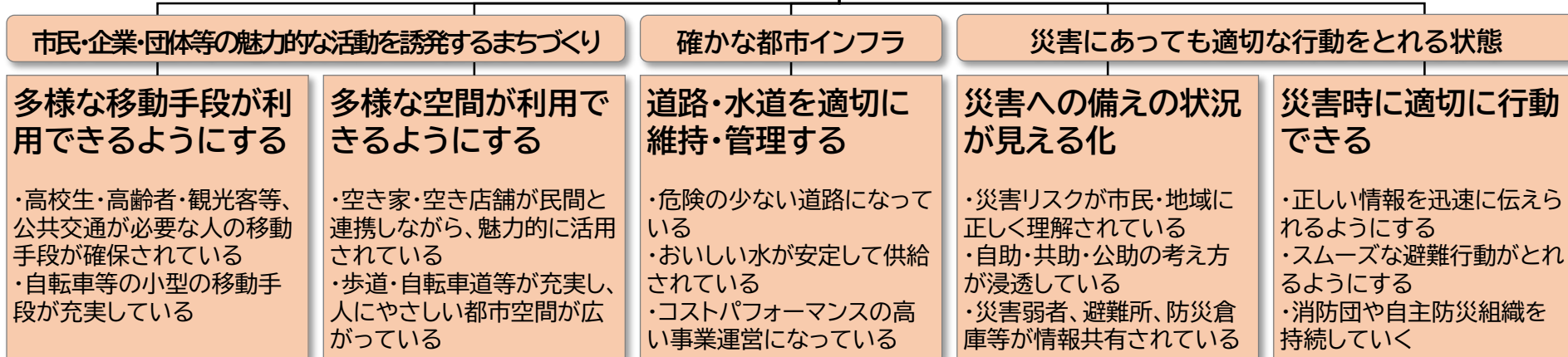
私たちの目的は、確かに魅力的な人々の暮らしの土台があって、いざという時にも安全と安心が得られることだから

「10年後のありたい姿」は

**安定した都市インフラの上で、まちでの活動を誘発する仕掛けが充実するとともに、災害等から生活を守り、いち早く日常を取り戻す備えが出来ていること**

です

この「ありたい姿」の実現には、



の実現が必要

## 【ワークショップの概要】

・都市インフラの役割について、次の2つがある。

① 日々の暮らしを支える土台としての役割 ② まちの魅力を創出していく土台としての役割

・①については、一定のサービス水準を確保・維持していく必要性が確認された。

・②については、「いくら整備しても、使われないと意味がない」、「投資されてきた、中心市街地のにぎわいが減っている」という問題意識のもと、公共交通などで3K(高齢者、高校生、観光客)移動の選択肢が増えれば人が集まる場所が変わり、ビジネス・活動が成り立ちやすくなることや、人を優先した道路で事故が減ることなど、都市インフラができることについてアイデアが出された。

→②については、他分野とも連携して、具体的な取組を拡げていくことが求められる。

・都市インフラがあるうえで、防災についての安心感を得るには、災害時の具体的な行動が見えている状態をつくるのが重要である。そのためにも、バランスよく自助・共助・公助の役割分担がなされ、それぞれに備えや訓練ができている状態をつくるのが求められる。

「10年後のありたい姿」は

市民と市役所がともに「ジブンゴト」ではじめる取り組みが、多様な人材や組織を  
ひきつけ、共創が加速していること

です

この「ありたい姿」の実現には、

「おまかせ」にしない市民

- ・困りごとがあれば、まず、自分たちでできることを考える
- ・かしこまらず、負担が大きくなることができることに取組んでいる
- ・公共性や行政との関係について子ども・若者が自然に学び、関心を持ち、協力している。
- ・シニア世代を中心に各世代が地域や社会のなかで居場所と出番を持っている
- ・若者が独自のムーブメントや流行を生み出し、地域の魅力をつくっている

ジブンゴトとして挑戦する職員と市役所

志を軸に内外で連携する  
スマートな市役所

- ・政策や施設の理念・志が風化せず、引き継がれている
- ・膨張しない「足したら引く」スリムでスマートな行政
- ・何でも引き受けるのではなく、すべきことに集中し外部のパートナーと連携して成果をあげる
- ・タテ割りでなく連携する市役所
- ・サービスがわかりやすく、選べる

発想豊かに挑戦する  
オープンな職員

- ・職員自身が仕事をジブンゴト化している(副業も活発)
- ・職員が常に危機感を持ちながら仕事をしている
- ・民間や新参者に思い切って任せ、一緒にやってみる、文化が継承されている
- ・多彩な個性の職員がいて、職場としても人気

多様な人材と組織を  
ひきつける地域

- ・地域課題やニーズが可視化され、オープンになって、関わることのできる箇所が見える
- ・地域の担い手(個人・企業)が市内外から集まり、連携し、参画者にも地域住民にも成果が実感されている
- ・外部パートナーが移住や定住し、また、仲間を呼んでくる好循環がある

の実現が必要です

【ワークショップの概要】

- ・まちづくりにおいて重要なことは、困ったことがあれば、当事者として問題を解決しようとする姿勢である。小さなことでも、年齢に関係なく、自分以外の多くの人に関係する問題に関心を持ち協力する機会が豊富にあるため、それらをきっかけとして、役所任せにしない姿勢を持つ市民になりたい。
- ・一方、市役所も、政策の目的や理念を自分の言葉にして、成果を出すために庁内や市役所以外の団体との連携を活発に行っている。行政が何でもやるという発想から、中間支援や人のつなぎ役などに集中し、より多くの成果を生み出せるようになってほしい。
- ・職員自身が仕事をジブンゴト化し、市民目線や受益者目線をもって良い結果ができるように工夫しながら仕事を行っている。また、副業も含めて、自身の趣味や仕事の幅を広げつつ、人脈や経験が本業にもプラスの効果をもたらしている。常に危機感をもっており、現状をよりよく改善していこうと挑戦したい。
- ・このような市民と市役所が、多様な人材と組織を引き付け、移住や事業連携が活発化し、まちを前進させてほしい。

# 各政策分野「10年後のありたい姿」まとめ

政策分野		10年後のありたい姿(約束する価値・体験)
A 次世代共育	①パートナーシップ・子育て	家族の多様性やそれぞれの幸せについての理解のもと、 <b>家庭環境によらず子どもと家族が応援</b> され、安心して支援やサービスが得られる
	②学校教育・家庭支援	<b>すべての子どもたちがワクワクする学びを自ら発見</b> できるとともに、周りへも共感でき、「ここで育ってよかった」と思う体験ができる
	③伝統・芸術文化・スポーツ・生涯学習	一人ひとりが特別好きな <b>余暇活動で自身と次世代の笑顔溢れる豊かな生活</b> をつくり、このことが誇りや愛着、新たなつながりを生んでいる
B 共創循環	④地域経済・産業・就労+⑥観光	塩尻に魅力と価値を見出す人たちが <b>つながり、喜びと誇りを持ちながら働き、多様で付加価値の高い事業・商品・サービス</b> を支えている
	⑤環境・気候	生活や経済活動で、エネルギーをはじめ調達可能な <b>未利用資源が発見・活用</b> されて <b>生活の充実や楽しみ</b> になり、都市の特徴と認識されている
	⑩協働参画・行政運営+⑥交流	市民と行政が <b>ともに「ジブンゴト」ではじめる取り組み</b> が、多様な人材や組織をひきつけ、共創が加速している
C 安心共生	⑦地域社会、共助・互助	ゆるやかなつながりと、感謝が循環するお互い様文化で、 <b>住民同士で日常生活の基盤</b> を作り、困りごとに動いていける
	⑧医療・介護・保健・福祉(公助)	一人ひとりが老いや健康に向き合い、自らの健康を守ることや周りに対して出来ることを考え動き、 <b>日常生活を自立して送る</b> ことができる
	⑨インフラ・防災・まちづくり	安定した都市インフラの上で、 <b>まちでの活動を誘発</b> する仕掛けが充実するとともに、 <b>災害等から生活を守り、いち早く日常を取り戻す備え</b> が出来ている